

まとめ—室町時代山寺の景観を伝える道路—

今回の発掘調査によって、次のようなことがわかりました。

- ①少なくとも15世紀末以降、阿弥陀寺遺跡の今回の調査範囲においては、直線的な道路が麓から山頂に向かって延びており、その左右にひな壇状の平坦面が展開する、という景観であった。
- ②道路は幅約4mで、その路面左右には側溝が設置され、南側溝は暗渠と思われる構造を持っていた。
- ③平坦面と道路の間の一部には塀が設置されていた。
- ④路面の一部に石段があり、方形の浅い掘り込み(方形水溜状遺構)が設けられ、水場としての機能が想定された。

阿弥陀寺のような室町時代の山寺では、「道」は重要な構成要素です。「道」が、寺院施設を設計するうえでの軸になるからです。しかし、この時期の山寺の「道」について本格的な発掘調査で構造が明らかになった事例は、福井県勝山市の白山平泉寺^{はくさんへいせんじ}での調査で石敷きの路面や板石で蓋がされた側溝などの構造を持つ道路が確認された例が、これまでではほぼ唯一と呼べる事例でした。今回の調査はそれに続く二例目で、実態が不明だった阿弥陀寺の構造を理解するためだけでなく、室町時代の山寺が具体的にどのような景観を呈していたのかを考える上でも大きな意味を持ちます。

また、側溝の暗渠化や平坦面の保護構造、水場と思われる施設の設置などが実施されていることから、高度な土木技術を有する集団が阿弥陀寺に存在していたと考えられます。今回の調査成果は、室町時代の山寺がどのような姿で、どのような人々が起居していたのかを具体的に理解するための重要な材料となるものと言えます。

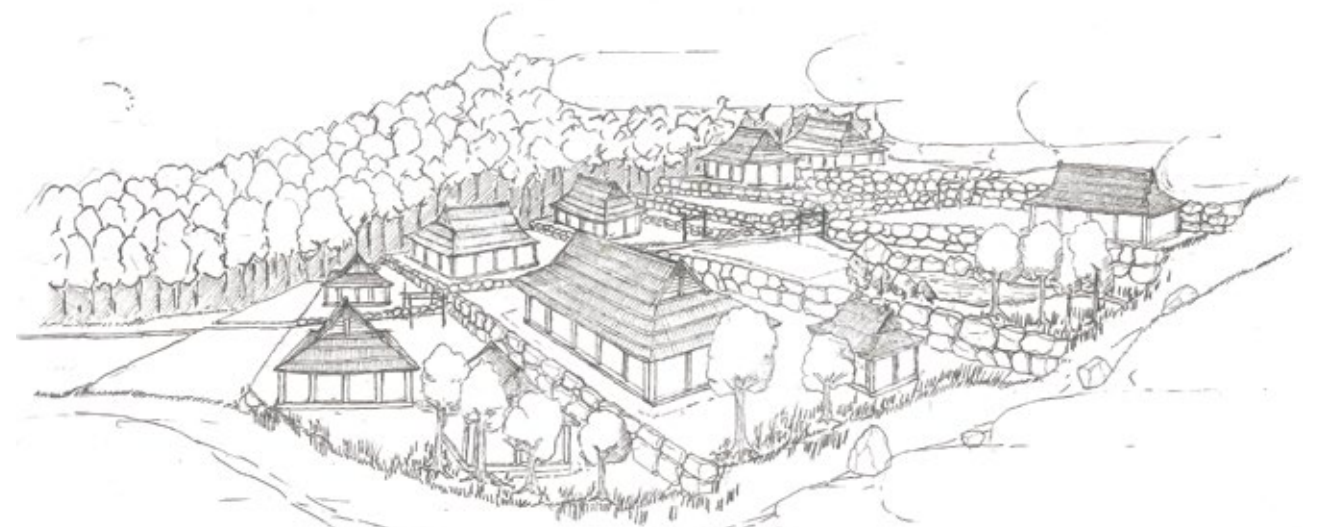


図4 阿弥陀寺遺跡想像図

* 今回の発掘調査成果は反映されていません。

表1 阿弥陀寺の歴史と関連する主な出来事

時代区分	奈良時代以前	平安時代～鎌倉時代	室町時代	安土・桃山時代	江戸時代	明治時代～令和
主な出来事	仏教伝来 (6世紀前半)	794年 平安京遷都	1467年 応仁の乱始まる	1571年 比叡山焼き討ち 1579年 安土城完成 1600年 関ヶ原の戦い		1868年 明治改元 1939年 第二次世界大戦
阿弥陀寺の歴史	大島・奥津嶋神社建立 (伝承)	865年 阿弥陀寺建立	今回発見した道路遺構はこの時期!	1571年 阿弥陀寺焼き討ち	平坦地を畑に転用?	第二次世界大戦前後まで畑として利用 2022年 発掘調査開始
	8世紀	14世紀	16世紀	19世紀		

あみだじ 阿弥陀寺遺跡発掘調査現地説明会資料

令和6年(2024年)6月2日(日)／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡と調査の概要

遺跡の概要 阿弥陀寺遺跡は近江八幡市北津田町・島町に所在する遺跡です。その名の由来となった阿弥陀寺は平安時代に建立された寺院で、『日本三代実録』・『大嶋・奥津嶋神社文書』などによると、貞観7年(865年)に大和・元興寺^{がんとうじ}の僧賢和^{けんわ}により奥津嶋神社の神宮寺^{じんぐうじ}(神仏習合思想に基づき、神社に附属して建てられた仏教寺院や仏堂)として創建されました。また、それらの文書には東谷・西谷・北谷に坊群があった、との記述があります。中世には多くの坊があり、伊崎寺^{いさきじ}(近江八幡市白王町)を中心とする天台回峰行^{てんだいかいほうぎょう}のルートにも組み込まれていて、天台宗の重要な行場とみなされていました。しかし、延暦寺が焼き討ちされた元亀2年(1571年)に織田信長による焼き討ちをうけて衰微したと伝えられています。

現在の阿弥陀寺は、江戸時代に再建された臨済宗の小さな本堂と山門が残るだけですが、その周辺には山麓にむけて直線的に道がのび、その左右に複数の平坦面がひな壇状に展開しています。さらに、北や東の谷筋にも、直線道と多数の平坦面群からなる同様の施設が確認できます。おそらく、これらが上記の「西谷」・「東谷」・「北谷」に相当するのでしょう。今回の調査地は「北谷」に含まれることになります。

調査の概要 公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県東近江土木事務所が計画する堂川補助通常砂防工事に伴う発掘調査を昨年(2022年)11月より実施しており、現在も調査継続中です。

令和4年度の調査では、土石流の痕跡や江戸時代の石積などを確認しました。令和5年度の調査では、複数

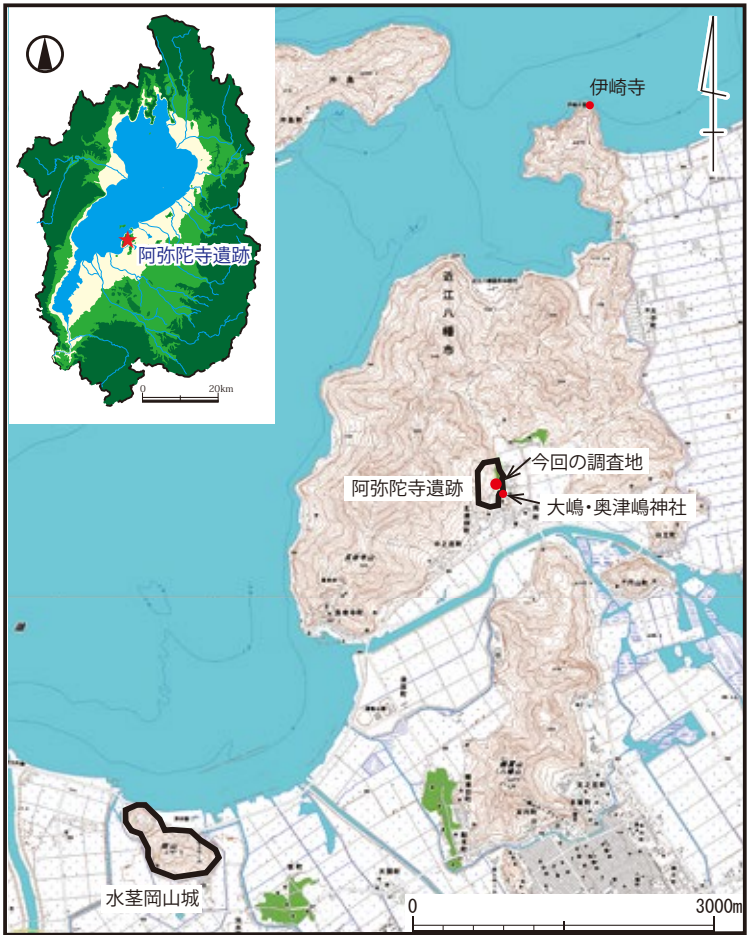


図1 阿弥陀寺遺跡と今回の調査地点

の石積・石垣や道路遺構を確認しました。石垣の一つは、水荃岡山城^{すいけいおかやまじょう}の石垣と同様の構造を持ち、近江における城郭への石垣の導入時期のものと考えられます。今回発見した道路遺構は、遺構面から15世紀から16世紀の陶磁器が出土しており、室町時代に使用されていたと見られます。

道路遺構 道路遺構は、検出長約26.0m×幅約4.0mを測り、標高は118.4m～122.3mで、現状での比高は約4mになります。路面左右には溝(北側溝・南側溝)があり、北側溝が途切れる位置から山頂側に向けて、北東側の平坦面との境では石列を検出しました。さらに、北側溝が設置されている範囲の路面では、石段を4段検出しました。腐葉土やその下の堆積土からは、15世紀～16世紀の土器・陶磁器、近世～近代の陶磁器・瓦、硯などの石製品、鍋・釘などの鉄製品、古銭などが出土しました。

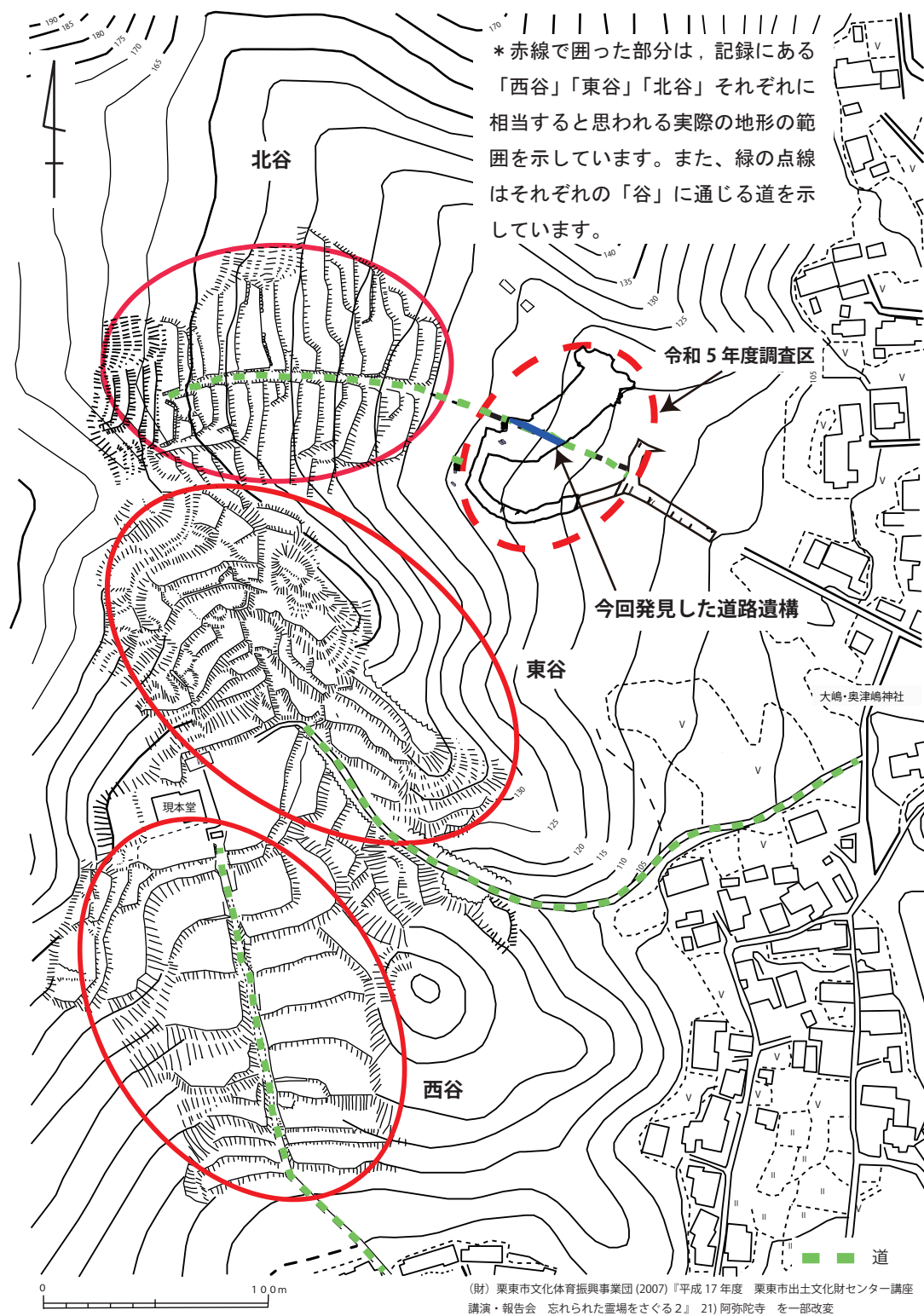


図2 阿弥陀寺遺跡地形図



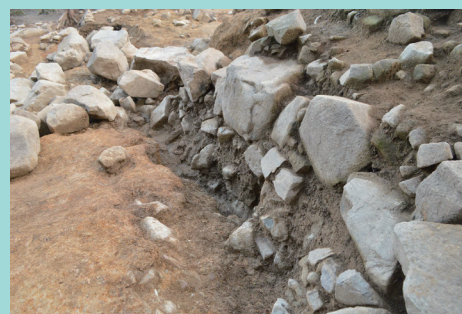
南側溝 麓側平坦面保護構造

麓側に近い部分ではその上に長軸1.2m前後の大きな石を立てて、その上に白っぽい粘土を貼って補強しています。この構造は南西側平坦面の盛り土が流出しないよう保護するためのものと考えられます。



ほうけいみずためじょういこう
方形水溜状遺構

方形水溜状遺構は南側溝の北東側に接して、検出長約6.4m、検出幅約2.0mを測ります。路面幅の約半分を占め、中央部分は地山を掘削して底面をほぼ水平に成形しています。側溝に接していることから、山頂側から流下する水を溜める機能を持っていた可能性があります。



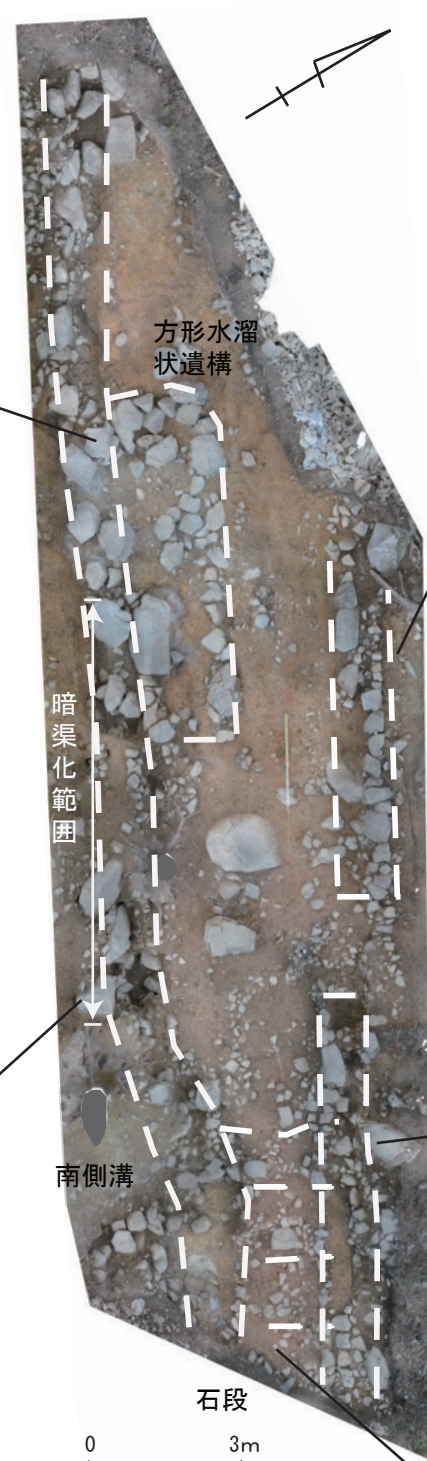
みなみそっこう
南側溝

南側溝は道路遺構の南西側にあって、山頂から麓側にかけて延びています。断面の形は底が丸く、山頂側から約5.0m付近までは開口しています。



南側溝 暗渠部分断面

南側溝は南西側平坦面に接する部分が暗渠化されていたようです。側溝の中に径0.2m～0.3mの石材を充填しています。



方形水溜
状遺構

暗渠化
範囲

石列

南側溝

北側溝

石段

0 3m

図3 道路遺構全体図



石列

石列は道路遺構北東側の、北東側平坦面との境付近で検出しました。検出長約8.4m、検出幅約0.8m、高さ約0.5mを測ります。長軸0.2m～0.8mの石を北東側平坦面に向けて面を揃えるように一列に並べています。道路遺構と北東側平坦面を区切る堀の基礎部分と考えています。



きたそっこう
北側溝

北側溝は道路遺構の北東側に位置し、山頂側から麓側に向かって延びています。長さは検出長約8.4m、検出幅約0.4m、深さ約0.4mを測ります。

北東側平坦面への入り口部分には石材を詰めて、暗渠化していたと見られます。



石段

北東側平坦面への入り口と思われる地点から麓側にかけて、4段分の石段を検出しました。赤褐色の土を貼って、そこに段差を設けて石を設置しています。設置した場所が北東側の平坦面への入り口と連動しているので、進入路として設置された可能性があります。